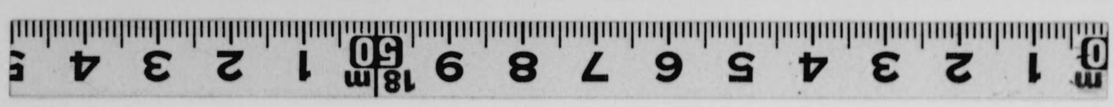
372
335



400

東京市長
法學博士 子爵 田尻稻次郎閣下題辭
日本郵船株式會社
副社長 工學博士 須田利信閣下題辭
梅村大庭俊太郎先生題詩

加賀谷定治 著

草茅危言

372-336

東京市長
法學博士 子爵 田尻稻次郎閣下題辭
日本郵船株式會社
副社長 工學博士 須田利信閣下題辭
梅村大庭俊太郎先生題詩
加賀谷定治 著

草茅危言

大正
9.1.9
内交

可怜獨雁叫

群夜殘月聲

寒港上秋

北雷

慶郎

乙未八月

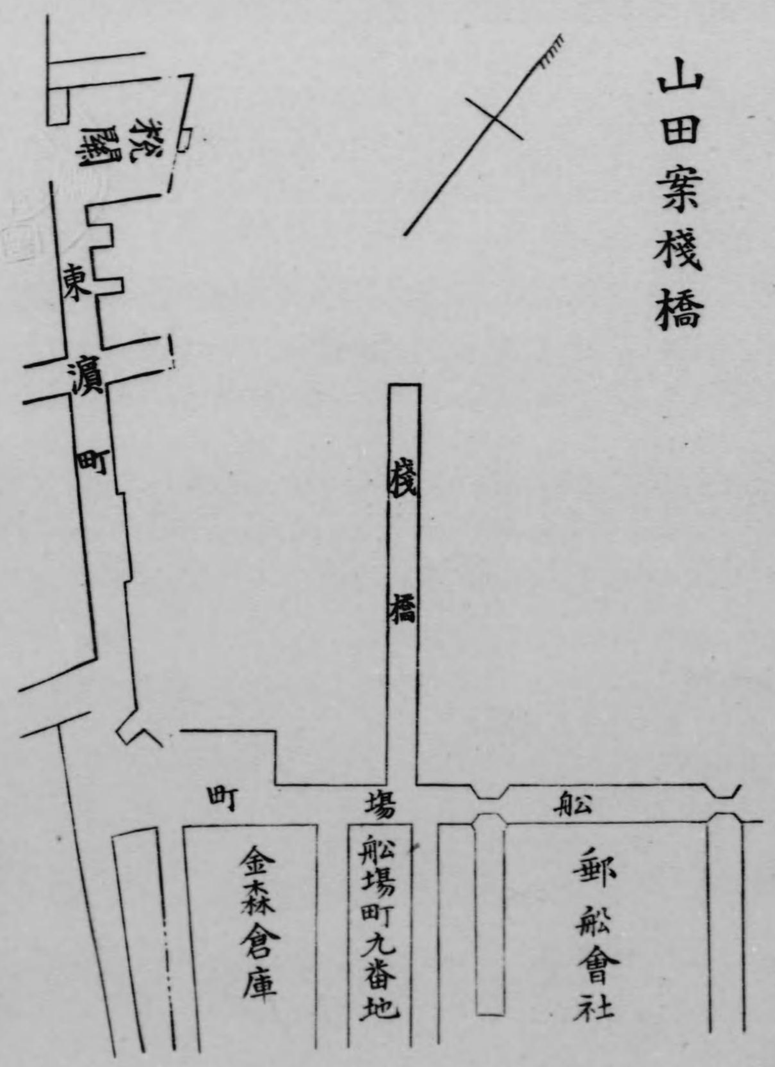
利信題

純誠義憤是先天時弊痛歎
醒惰眠卓見說來還說去藻
思彩筆幾雄篇
一詩代叙文以題草茅危言
大正戊午皐月　大庾梅村

萍蹤三十載 漂泊淼茫間
勿笑無根蔕 優游意自閑

函館埠頭に立てる著者

山田案棧橋



自序

此の書、予が區事に關する近時の論文、數篇を集輯したるもの、其の詞旨淺末、采覽するに足らずと雖も、朋知の慫慂默し難く、遂に之を剞劂に付することとせり。讀者、或は、予の危言を抗し、區の時病を議するを見、徒に、病を論ずることを樂んで、病を治するに憚ると爲すものなきに非ざるべけれど、彼の藥餌針灸、能く沈患痼疾を瘳すの國手に至りては、蓋し、世間別に其の人あらん、故に、溫補峻劑の可否の如きは、之を良工に讓り、敢て此に言及せず。夫れ、頸を延べて斃るゝことを待ち、自ら策無しと言ふものあらば、司命と雖も、之を奈

何ともすることなけん。若し、良醫をして、蚤く事に從ふことを得せしめば、則ち、疾已むべく、身活くべきなり。吾人、常に病を論じて、厭はざる所以のもの、亦、區民をして、後者に出でしめんと欲する微意に外ならず。予や、素と、牙籌を執り、簿書矻々として、闘茸の中に在る者。彼の毫を伸べて墨を弄し、藻耀を爲して、人に誇詡せんとするが如きは、之を望む所に非ざるのみか、此くの如きは、是れ、實に、菲才予の勝ふる所に非ざるなり。此の書、片言隻字も、悉く是れ、予が忡々たる、憂鄉の至誠より出でしもの、肝膽の切なるに任へずして、後、作る所なり。故に、魁奇の觀、藻采の飾、以て衆人の目を炫するに足るものなく、却て、言の過切直想、世の罪する所に在

らんとす。然りと雖も、怪巧瑰琦の文、曲折瓊瓏の詞の如きは、世人乞ふ、去て之を今人の俗尙に投ぜる、兎園册子に求めよ。吾れ、唯だ區を思ふことを知るのみ、區を憂ふることを知るのみ。夫れ、世俗、言を正うするものは、之を誹謗と謂ひ、過を過むるものは、之を妖言と謂ふと雖も、予、豈に、促訾、慄斯、喔咿、嚅唲、以て偸合、容を取るに忍びんや。心に蓄ふるもの、咸な其の喙を開くことを得、畏忌厭憚して、敢て胸情を直擧せざるが如きは、決して、吾が百年父母の鄉に對し、忠なる所以に非ず。是れ、予、自ら其の罷駑、卑賤を料らず、其の款々の愚を效し、其の拳々の忠を列する所以なり。烏鳶の卵、毀たれずして後、鳳皇至り、誹謗

の罪、誅せられずして後、良言進む、讀者、幸に、予の、狂狷妄發と、蕪詞不文とを以て、予が愛鄉の至誠を沒することなくんば、喜び、望外に出づ。

大正七年五月上浣

加賀谷定治識

草茅危言目次

老いたる函館……一
港灣調査……一五
愛鄉心……二九
棧橋問題……四五
併て故山田區長を弔す

草茅危言

加賀谷定治著

老いたる函館

佛國人、常に、自國を稱して老いたる佛國(La vieille France)と曰ひ、而して、獨米を呼んで、少き獨逸(La jeune Allemagne)、少き米國(La jeune Amerique)と曰ふ。蓋し、佛國人の性情たる、頗る進取の念に乏しくして、動もすれば保守退嬰に陷り易く、鉅億の貨財を蓄積すれど、止だ、利殖に專にして、之を活用して、以て世界の市場に輸贏を競はんとする勇を缺く。要するに、投資國の實はあらんも、企業國を以て與すべからざるに似たり。其の民風たる、閑雅の美點は之れあり、粹溫の長

所は之れありとするも、而かも、精健濶大の氣象に乏しく、宛然、老成人の態あり。是れ、獨米を目するに妙齢を以てし、自ら老いたる佛國を以て甘んじ、敢て新進の獨米に頡頏せんとする志なき所以なるか。然りと雖も、最も奇なるは佛人の性格なり。老衰せるが如くなれども老衰せず、懦弱の如くなれども懦弱ならず、怠惰なるが如くなれども勤勉、奢侈の如くなれども儉約、是れ、實に、社稷、將に危急なるが如くにて危急ならず、國、且に顚沛せんとするが如くにて顚沛せず、挫けて愈々奮ひ、敗れて愈々張り、革命に、戰爭に、屯變を經る毎に、却て益々隆興せんとする所以なるべし。

人或は云ふ、函館は其の狀勢、頗る佛國に類するものあり、老いたる函館と稱して、敢て不可なかるべしと。然り、或點に於ては、頗る佛國に類似するものあること、吾人、亦、首肯せざる能はざる所、老いたりと謂はるゝも、一概に蔑稱として、之を拒むべからざるに似たり。其の鉅資を擁して、而かも之を運用する術に乏しく、單に放資に專にして、企業の勇を缺き、商に、工に、他の侵犯を被りて、恬然、

晏如たる、老羸、無氣力、佛國に類する所、無しと云ふべからず。されど、等しく、老者と謂ふも、亦、其の間に較然、區別彙分あることを知らざるべからず。則ち、矍鑠、壯者を凌ぐものあり、頽頹、死に垂んとするものあり。佛國の如きは、當に前者に屬すと爲すべく、我が函館の如きは、當に後者に屬すと謂ふべし。斯く云はゞ、予輩を以て、徒に瑰異の言を弄し、矯激の論を逞うし、世人を蠱惑して、以て快を一時に取ると爲すものなきに非ざるべし。然りと雖も、予輩、豈に敢て、逞奇眩異、急言竭論、妄りに區民を駭愕せしめ、區民を悲傷せしめて、自ら昂々たるものならんや、仔細に之を檢すれば、事實に於て、否むべからざるものあることを奈何せん。由來、屯難に遭罹する毎に、益々反撥力を加へ來るは、佛人の特長にして、其の十八世紀末に於けるや、國勢、萎靡、不振を極め、國民の元氣、消耗、鈍眊、痿靡して、國幾んと亡び、祀幾んと絶えんとしたるにも拘らず、倏忽、空前の大革命を起し、生意國中に勃々として、大小老稚、皆奮心あり、遂に、沛然、江河を決するが若き勢を以て、外、敵虜を掃蕩し、内、秕政を芟除し、改弦更張、再び雄を歐洲の中

央に稱ふるに至れり。之を殆んと、瓦解の憂、土崩の患ある、今日の露國に比せば、其の懸隔、奚んぞ啻に逕庭のみならんや。然り而して、普佛戰爭後に於ける佛國は如何、財彈き、力痛み、到底再起すること能はざるべしと、豫想せられたるにも拘らず、其の、國力回復の速かなること、曠古無前にして、四隣をして震駭せしめ、彼の意氣八荒に彝ゆる概ある、恣睢桀驁の、鐵血宰相ビスマークすら、其の膽を破り其の心を寒うしたり。此の次の大戰に際しても、寇讐の殘害を被り、無數の生靈を喪ひ、莫大の帑財を糜耗せるより、世人或は、國運の陵遲を疑ひ、鼎の輕重を問はんとするものなきに非ずと雖も、是れ畢竟、其の皮毛を知りて、未だ其の神髄を知らざるものなり。大戰前の佛國は、或は自他ともに與すが如く、老大にして、恬安無爲を樂む、無氣力の國民なりしならん。假りに經濟上に就て之を見るも、國外に投資すること、五百億法の鉅額に上ると稱せられ、其の源泉、滾々として渴きざる、資金の供給を受くるもの、殆んと坤輿の全土に及び、英國を除いては、全く之と比肩するものなき、居然たる資本國にして、世界各國の資金需要家より、所謂カナンの聖土の如く、仰望せらるゝにも拘らず、貿易國としては、牛歩遲々、啻に英獨米と竝驅齊駕すること能はざるのみか、轟爾たる和蘭に、すら及ぶこと能はず。其の他、諸般の事物、多く之に類するものありて、鬱積磅礴たる國民の元氣は、何處より之を見るも、到底、認むること能はざる所なりき。然りと雖も、一度、醜虜の凶威虐焰を蒙り、醒覺して、國を矯だし、俗を革めたる、佛人は、亦、疇昔の佛人に非ず。保守退嬰は進取敢爲に易り、優柔懦弱は變じて果鋭勁悍の氣象とはなれり。曩には、單に放資國を以て自ら甘心したるもの、今日に於ては、思を遷し、慮を廻し、一轉して、企業國となり貿易國となり、首尾を撼へ、翼鱗を奮ひて、踴躍疾進、雌雄を世界の商戰場裡に爭はんとす。如何にして工業を振起すべきか、如何にして商業を隆興せしむべきかは、今や、佛人、上下の蚤夜、焦神して攻究、懈らざる所、其の工匠たると、其の商賈たると、其の官吏たると、其の民人たるとに論なく、擧つて海外貿易の振興に、熱中するに至れり。其の結果、或は商業會議所の活動となり、或は外國貿易國民協會(L'office

National du Commerce Exterieur) の主唱にかゝる、獨逸ライプチヒの其に模したる里昂、巴里に於ける、見本市場の開催となり、或は輸出工業に對する、銀行及び資本家の援助となり、其の他、彼等の努力の蹟、一々之を擧ぐれば、僕を更ふるも何んぞ終へん。殊に、吾人の最も注意を怠るべからざるは、戰後の海運界に於ける、彼が翱翔に在りとす。輓近、佛國に於ける、造船術の著しき進歩と、船舶製造數の驚くべき增加とは、世人の聚目して視る所にして、就中、セーヌ河畔に於ける、造船業の勃興は、吾人をして、張目瞻視せしむるに足るものあり。是れ一には、政府の誘導、其の宜きを得たるに因る所あるべきも、亦、以て海上に奮飛せんとする、佛國民の大なる抱負と、貿易國として立たんとする、佛人の堅固なる決意とに、職由すと爲さゞるべからず。大戰以前、年々、一億二千萬圓の運賃を、外舶に靡したる、航業不振の佛國は、今や前疵を破去し、驟然として起ち、世界の航運界に縱騁馳騖して、雄を洋上に競はんと欲するに至れり。若し夫れ、巴里海港の企畫に至りては、其の規模の壯、夫の神禹を、九泉の下に起すとも、彼れ猶ほ

後へに瞠若たるものあるべく、以て、佛國人が、如何に遠謀深慮、國家の隆興を計圖し、而して、如何に今より翼を矯け、翮を厲けて、戰後の飛躍に備へつゝあるかを窺察するに難からざるものあるべし。何人か、其の氣魄の大なること是くの如く、其の智慮の明なること是くの如く、而して、盤錯に遇うて挫けず、紛擾に處して亂れざる、此の佛國人を目して、日、西山に薄れる、氣息、奄々たる老人に比し、之を藐視するものぞ。之を老年と稱すと雖も、思慮圓熟して、而かも剛健、壯者を凌ぎ、老いて益々壯んなる耆宿と爲さゞるべからず。

我が函館の、佛國に類すと稱せらるゝは、單に老人の態あるを以てのみにして、其の他に於て、又、何の肖似する所かある。佛人の美點たる、勤勉、儉約の風習は、我が函館に於て、果して何處に之を認め得べき。誠に佚豫、以て爲すべからず、奢泰以て持すべからず。願れば、樸愿の風、漸く地を掃ふて、華囂の俗、益々區民の間に浸淫し、恥尙、已に其の所を失ひつゝあるに非ずや。而して、奎星、燦々として、民人都閑長厚の美風あるは、彼れの能く光耀、四海を究め、夏夷をして悉く

慕嚮、已まざらしむる所以なれども、風化未だ興らず、聲教、文物闕如し、粗野の陋俗を脱せざるは、是れ我が函館の、憂とすべき所にあらざるか。夫の社會教育の如き、佛國に於ては、博物館、圖書館等の設備、至らざる所なく、隨て、國民の趣味智識の普く進歩、向上せること、濫りに、他國人の、隨跟、追蹤を許さゞるものあり。巴里國立圖書館の如きも、其の藏書數、約二百萬卷に達すと稱せられ、實に世界に於ける圖書館中の巨擘たるは、人の既に之を稔知する所、而して、又、ヴエルサイユ、ルーブル、若くは、リユクサンブール博物館の如き、充牣せる壁間、楣間の名畫、名刻、或は雄偉、或は華麗、觀者をして、眩目、褫魂せしむ、眞に世界の極麗、天下の珍藏なり。其の他、國立、市立の、工藝、農業、古物、教育等の諸種の博物館、一々、之を指數すべからず。是れ、實に、佛國の英華にして、豈に啻に、意を當前に快くするのみならんや、冥々の中、其の人智を啓發し、教化を裨助する功、實に著大なるものあり。勿論、吾人は、郁々乎たる、文物共に蔵莊の、佛國を取り來りて、直に商業地たる我が函館に比し、妄りに我を貶する、愚を爲すものにあらず。されど、我

が函館の社會教育上の設備、全然闕如して、其の蕭條たる景況、恰も不毛荒漠の野を行くが如き觀あるは、區民を甄陶する上に於て、甚だ遺憾とすべき所、吾人は、區の爲政者が、常に、區民の德性を涵泳し、風を移し、俗を易ふる所以の路を、忽にすることを、深嗟して屢歎するものなり。又、愛鄉の心、愛國の念、鬱勃熾烈にして、劍も擊つこと能はず、戟も撞くこと能はず、車も衝くこと能はず、騎も突くこと能はざるは、是れ、實に佛國人の、世界に誇稱すべき特長にして、彼の克く、外敵の侵侮を禦ぎ、幾度か國難に遭うて、而かも自若たる所以なり。吾人は、決して、函館區民が、愛國の念、愛鄉の心、厚からずとは言はず、然りと雖も、果して、佛人の如く熱烈に、佛人の如く熾盛なりや否やと云ふに至りては、聊か疑はざるを得ざる所なり。日露戰役當時、露國浦鹽艦隊、來寇に際し、我が函館區民の、周章狼狽、其の度を失せるを見て、在留支那商賈中、奇言を發したるものあり、曰く、區民は愛國心を有するかと、是れ鴟梟の鳳凰を嘲り、鷦鳩の大鵬を笑ふに類し、頗る滑稽の觀なき能はずして、而して、又、一場の戲語なりや、將た一種の諷諫なり

や、之れを知るに苦むと雖も、區民は、之れを以て、徒に呵々とし、啞々として、一笑に附し去ること能はざる所なるべし。斯く觀察し來れば、止だ、其の彷彿近似すと爲すべきは、倭靡を以て相競ふ、多財の徒が馴致したる、我が函館區民の、厭ふべき輕佻浮華の惡風のみにして、是れ、頗る、彼の佛國の一部、都人士間に浸淫せる、頽廢の風潮に類すと爲すべし。我が函館は、佛國に酷似すと稱すと雖も、佛國の良風美俗に就ては、纖毫、近似する所なくして、却て、其の陋習薄俗、厭惡すべく排擯すべきものに對してのみ、同じき所あるは、決して吾人の喜ぶべき所にあらず。

夫れ等しく老いたりと稱するも、彼は矍鑠壯夫を凌ぐ老者にして、我は形神變衰焦々然として復た生意なき老人なり。彼や、國運を賭して、敵讐の擊攘を事とする中にも、尙ほ長慮、後顧、商工業の振興、海外貿易の發展に孳々として、己に憊るゝ力、既に費せる財を、速に回復し、戰後、覇を世界に稱へんとする、智慮あり、分辨ある國民なり。而して、我や、人々、其の識小にして、遠大の計なく、利口靡々として、自利に急に、徒に歐洲戰亂に因る、僥倖の利得に充詘して、上恬下嬉、相共に奢侈、淫逸を縱にし、大にしては、社稷の安危、國家の得失、小にしては、函館の休戚、區民の利害を意とするもの寡し。上、グレマンソーの如き、遠心曠度、瞻智宏材にして、國を愛し鄕を憂ふるを以て、嗜慾とする達士、之を指導することなく、下、舊來の弊習を瀏洗して、踴躍、矜奮、世界の市場に、輸贏を決せんとする、佛國商工業者の如き、敢爲の氣象に乏し。我や、只、生意蕭索、日に枯槁に就くのみ、既に佛人の老謀なく、又、佛人の壯事なし、吾人、豈に區民の爲めに、反覆之を痛嘆せざらんとするも得べけんや。夫れ慮らずんば胡んぞ獲ん、爲さずんば胡んぞ成らん、港灣に鐵道に、或は商に、或は工に、區民の施設經營を待つもの、累々眼前に堆積して、而かも、地形は便、山川は利、財用は足り、凡百の事業、敢て意の如くならざるものなきにも拘らず、抑も何を苦んで區民は、企業の念なく、成を樂む意なく、偷安姑息、巽懦畏怯、徒だ無事無爲に、其の日を送ることを是れ事とする。見よ、十數年前、將た數十年前と比較して、我が函館は、果して、何處に、其の進步、發達

の認むべきものある、社會は歳推時移、日改月化して止まずと雖も、我が函館は、商に、工に、毫も其の面目を革むることなき、依然たる疇曩の函館に非ずや。殊に其の生命とも稱すべき港灣は、數十年來、何等改良を施す所なく、却て、日に月に、荒廢して、益々船舶碇繫の利便を減じつゝある狀態なり。大圏航路たる津輕海峽の要衝に當り、世界の商港として、社會より期待せらるゝにも拘らず、埠頭、倉庫、及び炭水供給等の設備闕如し、單に內地通商港たる資格すら、具備せずと云ふに至りては、是れ、社會の推移に卻行するもの、函館の前途、亦、岌々乎として危からずや。元來、勢力なるものは、盛んならざれば、則ち衰ふるものにして、其の、同一の地位に留止、停滯するを容さゞること、猶ほ、駿馬を驅て、峻坂を馳するに、中間、駐足の地なきがごときものなり。此の消長の理を知らずして、徒に保守退嬰を是れ事とするに於ては、我が函館は、其の陵遲衰微を俟たずして、其れ亦、何をか俟たんとする。今日の狀態を以てすれば、我が函館は、正に血氣衰竭せる羸老の病者にして、百體九竅は、之を具備すと雖も、其の精華、英靈の氣は去て、既に己に枵然として復た存せざることを奈何せん。此を彼の形神、充沃して、矍鑠、壯夫を凌ぐ概ある、佛國と、到底、日を同うして論ずべくもあらざるなり。嗚呼、老いたる哉、我が函館、衰へたる哉、我が函館。

斯く論斷し去らば、世人、或は是を以て甚だ悲觀に過ぐと爲し、予を非難し、予を掊擊するものなきに非ざらん。然りと雖も、先民、既に道破すらく、天下の事、懼るゝに成て、忽にするに敗る、懼るゝは福の原なり、忽にするは禍の門なり、幾を知る君子に非ずんば、孰か能く、滔天の浪を、涓々の始に遏めんと、予輩、此の言の至理なることを信ずるや久し。區の蚤知の士、先覺の人、以て何如と爲す、先憂の人、後樂の士、以て何如と爲す。嗟夫、疾なければ則ち必ずしも醫せず、過なければ則ち必ずしも論せず、醫は病の爲めに設け、論は過の爲めに設く。吾人の拳々亹々、力めて苦言を進め、危論を呈して已まざるもの、實に鄕土の殄瘁を、縮手傍觀するに忍びざる微衷に出づ。讀者、希くは之を察諒せよ。

防波、防沙堤の竣工、將に近きに在りとて、區民は欣躍交賀しつゝある今日、

吾れ獨り、世を憚らずして、却て、港灣は日に月に荒廢しつゝありと言ふ、人、或は予を目して瞽と爲し、或は予を目して狂と爲さん。愚瞽、狂顛の評、吾れ敢て爭はず、されど、事實は照然、誣ふべからず、是れ實に蔽ふべからざる、我が函館の現狀なり、數十年前には、港內水深く、輪船の埠頭に繫留するもの少なからざりしに、爾來、港澳漸く塡淤して、今日に於ては、汽船、帆船の泊歩に下碇すべからざるは勿論、彼の吃水、極めて淺き貨艀すら、潮を候するに非ずんば、埠頭に近くべからず。是れ荒廢に非ずして何んぞ、嗚呼、荒廢に非ずして何んぞ。

筆を秉て、覥縷せんと欲すれども、羈旅忽卒、終に章を成すこと能はず。彼の容與、閑易、紆餘委備の文の如き、之を今日の予に求むるものあらば、幷は誤れりとすべし。予、只、觸緒の感慨を、毫素に託し、以て、造次、忘るゝこと能はざる憂鄕の至誠を、聊か區民に愬へんと欲するに過ぎざるのみ。

（大正七年四月、東都東叡山下の客舍に於て）

港灣の調査

港灣の函館か、函館の港灣か、函館の生命は、實に港灣にあること、何人も異議なき所にして、又、玆に、多贅を俟つことなかるべし。元來、四面環海の島帝國に住しながら、海事に關する趣味の、頗る缺乏せるは、甚だ嘆ずべき、邦人の通弊なり。蓋し、是れ、夫の積世の鎖國の陋習に因するものにして、其の由來する所、遠しと雖も、今後、海上に雄飛せんと欲する、我が國民たるもの、大に反省する所なかるべからざるなり。さすがに海上王、大英國なり、文學と云はず、美術と云はず、其の題、其の材を海洋に取ること頗る多く、婦人、小子と雖も、尙ほ海事に對する趣味の、甚だ豐富なるを見る。吾人、嘗試に、ローヤル、アカデミイ(Royal Academy)の陳列畫を一瞥せんか、題を海洋に取るもの、頗る多きに、喫驚せざるを得ざるべし。是れ、瑣屑、猥細にして、言ふに足らざるに似たりと雖も、亦、以て、英國人の趣味、風尙を、窺ふに難からざるものあり。固より、等しく海國なりとはいへ、海上

に雄視すること既に久しき英國と、深閉固距、三百年、鎖國の陋習に薫染せられたる、我が國と、兩者、直に取て、之を比照するは、聊か妥當を失する嫌なき能はず。されど、徒だ翼を故枝に斂めんと欲するのみならば則ち已む、苟も、勁翮四海に同翔せんとする以上、邦人たるもの、大に海事に關する趣味と、知識の涵養に勗めざるべからざるべし。邦人が、如何に、海事に關する趣味の乏無にして、港灣に對する知識の淺薄なるかは、帝國の首都にして、品川灣を抱擁する、東京の市民すら、尚ほ、毫芒、築港の必要、價値を認めざるに徴しても、之を窺見し得べし。今や、巴里、伯林等が、海上に距ること頗る遠きにも拘らず、海港の企畫に就て、著著、其の歩を進めつゝあるに際し、海國民たる吾人は、此の帝都の現狀に對し、衷心、恒悒たらざるを得ざるものなり。東京市民、既に、築港に對し、淡乎として疎冷なること此くの如し、吾人は函館區民に對し、獨り、港灣問題を閑却することを刻責する所なかるべし。然りと雖も、我が函館は、既に港灣に依りて生活する以上、此の問題の攷究を怠るべからざるは、明白の理にして、必ずしも架說を

累ぬるを須ゐざる所なり。

勿論、我が函館には、之が調査機關として、港灣調査委員會のあるあり、則ち十人の區會議員と、六名の公民とより成る、常設委員會にして、從來、世務に通解する、區の名士、是に網羅せられ、訥々たる衆賢、其の任に當るを以て、此の港灣に對し、周詳縝密に、査覈を加へ、商量講究を爲してあるべしとは、世人の之を信ずる所、予輩も亦敢て、其の間に、是非の論議を挿まんと欲するものに非ず。されど、退いて港灣の現狀を顧れば、予輩徒に、口を噤し、舌を卷いて、默々たるに忍びざるものあり。意ふに、此の港灣は、實に、我が函館の死活の懸るもの、港灣の講究は、區民の熱中して一日も緩うすべからざる所、而して亦、此の港灣に關し、調査精究すべき、諸般の事業は、決して鮮少なりとすべからざるなり。勘査考察すべき許多の事業、眼前に堆積すと雖も、之に對し、從來、何等討究を加ふることなく、之を棄置し、冷眼に看過し、毫毛、之が改良發達の策を講せざればこそ、今日の如く、港灣の荒廢を來すなれ。夫れ、稽査すべき事業なきに非ざるなり、委員は、之

を査究する心意なきなり、而して、設施し匡改すべき事業なきに非ざるなり、委員は、港灣の改良、發達を圖る志望なきなり。若し委員にして、港灣の改良を企畫し、之が發達を計策する意志だにあらば、其の査明すべき事業、研覈を要する問題の多き、如何に濟々たる多士を以てするも、尙ほ、日、給するに暇あらざる憾あるなるべし。遮莫、吾人は敢て、改選後、日、猶ほ淺き、今回の港灣調査委員に對し、妄りに評隲することを好むものに非ず、蓋し、就任後、未だ幾ならずして、功業の如何を云々する地に、至らざるを以てなり。故に吾人は、前回の港灣調査委員に對し、一々、其の過を捃摭するにあらねど、僭越ながら、聊か批評を嘗み、併て新委員に對する、希望を陳べんと欲す。吾人、既に言へるが如く、港灣調査委員會なるものは、區の立法府に列する議員十名と、外に、區の耆宿、薦紳にして、區民の望を負ふ者、六名とにより、成立するものにして、實に我が函館に於ける、唯一の、港灣調査機關なり。其の調査、論議、規畫、措置、施爲が區に取りて、最高の權威たるべきは、何人も容認する所、隨て、吾人は委員會に對し、甚大の期待を爲すものなり。此くの如く、區民の、委員會に對する期望が、重、且つ、大なるものあるにも拘らず、該委員會は、抑も如何なる功績を擧げたる、果して、區民の信望に副ふ所ありしや。吾人の傳聞する所に據れば、昨年の如き、委員會を開くこと、纔に兩三回、而かも其の調査たる單に、內務省、若くは道廳の諮問に、答辯するが爲めに過ぎざりしと云ふにあらずや。是れ晷刻の緩を容さゞる、爛額焦眉の急たる港灣調査の業に對し、委員の取るべき、適當の擧措と謂ふことを得べきか、委員の能否、勤惰は、此一事を以てするも、已に分明にして、而して、彼等の成績の如きは、必ずしも、之を港灣の現狀に對照して、稽考する要なく、亦、此の一事を以て、直に之を判じ得べし。抑も、委員は、自ら進んで、調査を爲し、察覈を加へ、以て港灣の改良發達を計度せんと欲する念なく、志衰へ、氣惰り、所謂、自動的に非ずして、他動的に、義務上、已むを得ずして、調査に從事し、以て、僅に、尸位素餐の責を、塞がんと欲するものに似たり。若し調査委員にして、眞に、此の鄉土を愛し、此の鄉土を憂ふること、飢渴の如きものあらば、豈に人の督責、迫壁を俟て、然る後に、

慢然として、調査に從ふことあらんや。港灣調査に於ける、最高の機關たる、該委員會が、此くの如く、無爲を爲とし、無事を事とし、其の職に瘝曠して、毫末、區民の信賴、委託に副ふことなしとせば、區の要務、區の首務たる、港灣調査なるもの、其れ卒に寄附すべきところなき乎、是れ洵に、吾人の慷慨、深憂せざるを得ざる所なり。我が函館の死生の、由りて繫る所のものは、港灣にして、而して、人給家足の路も、亦、實に、玆にあることを知らば、一般區民と雖も、之に對し、決して、風馬牛たることを得ざるものなり。況んや、港灣調査の最高機關たる、該委員會に席を列する、委員、自身に於てをや、彼等の責務や、實に、重、且つ、大なるものありと云ふべく、若し彼等にして、自己の任の重く、道の悠なることを知らば、其の力を勤め、心を勞することを、正に、棲々、遑々、禹、家門を過ぎて入らざるが如くならざるべからざるべし。然るに、委員は、何等の自信、自覺なく、徒に此の大重の任を虛受し、而して、職を傾しで解慢、宴然として、苟身亡事を、是れ希ひ、戈かに些子の事、來るに遇うも、逡巡、退避し、畏縮逡惑して、但だ、區民の誣謗、譙責を逭るゝに足らざることを、恐るゝものに似たり。是くの如くんば、則ち徒に、員に備はるのみにして、港灣調査委員たる、自己の重大なる職責に對し、彼等は、汗顏、泚額する所なきを得るか如何。吾人は之に對し、深く嗟惜せざるを得ざるものなり。然りと雖も、既事の咎むべからざるを知るが故に、予輩は、徒に、前委員に對し、其の瑕纇を發摘し、刺譏、貶損する苛酷を敢てせざるべく、又、舊委員の擧措を以て、新委員の施爲を、揣摩猜度し、妄りに論議を加ふる愚を爲さゞるべし。唯、吾人は、改選せられたる今回の委員に對し、區民の依託に負くが如きことなく、自己の職責の大重なるを自覺する所ありて、誠心至意、其の職事に精力せんことを、希望して已まざるものなり。委員が、自己の、任の重く、職の大なることを、自覺するに於ては、從來の如く、名ありて其の實なく、苟偸、無爲單に、諮問に應ずるを以て、其の能と爲すが如きことなかるべきは勿論、自ら進んで、孳々として、港灣に關する諸般の調査に從事し、其の精藴を發盡して、匡建せんと欲する所多かるべく、以て、滔々、汩々たる、世界遷革の運は、益々之が修築、改良を促して已まざる、

前程萬里の、此港灣の發達を助成し、而して、此港灣より生ずる、無窮の利を享けしめ、我が十三萬餘口の、區民の福祉を增進するに、努むるに至るべきなり。

又、委員會の編制に對し、吾人の希望を述れば、元來、港灣問題なるもの、其の範圍、頗る廣大に亙るを以て、之が講究に際しては、大に其の門戸を開放し、周ねく、各職業、各階級の人士を招致し、多方面に渉りて、精密に、愼重に、研審することを要すべし。官吏可なり、公吏可なり、商業家、工業家可なり、漁業家亦可なり、彼等の研究、彼等の意見、務めて之を博采すべく、彼等に咨謀し、彼等と共に規畫を爲し、然る後に施行せば、能く廣益する所あるべし。是れ所謂、多士、大業を成し、群賢、弘績を濟すものなり。太山は土壤を讓らず、故に能く其の大を成す、河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を就すとは、先人も既に之を道へり。何ぞ必ずしも、衆論を却け、群議を排することを爲さん。世人、或は曰く、此くの如くんば、其の論議、頗る多岐に渉り、分騖背馳して、甲是乙非、嘈々、喨々、遂に收拾し易からず、却て調査の進行を、阻礙するに至らざるかと、是れ一理あるに似たりと雖も、畢竟、偏局の見に過ぎず。其の議、分出し、其の論、蜂起すと雖も、賢者をして、之を裁せしめ、智者をして、之を擇ばしめ、短を舍て、長を取らば、抑も何の害かある。若し夫れ、街談、巷議と雖も、取るべきものあらば、之を棄つべからず、是れ實に集思廣益の道なり。孔夫子曰く、三人行へば必ず我が師ありと、鄙諺に亦曰く、三人寄れば文殊の智慧と、三人の行、三人の智、尙ほ且つ此くの如し、況んや前述の如く、多方面の人士を、周ねく網羅するに於ては、豈に其の間に、一奇を畫し、一策を出すものあることなからんや。夫れ、官公吏は、彼等の該博、高遠なる識見に因り、之を討度すべく、又、商賈は、商業の方面より、工匠は工業の方面より、各自、港灣を稽査すべく、漁業家、亦、漁獲物、運輸、貯藏等の見地より、之を攻究し、之が意見を宣露する所あるべし、是くの如く、所謂四門を辟き、四目を明かにしてこそ、甫めて、其の調査の完璧を期し得べく、亦、必然の策を建て得べきなれ。吾人は此の理由よりして、現今の港灣調査委員會の制度の、規模極めて褊小なるに、慊らざる所あるものなり。然り而して、港灣調査なるもの、世上、多少の論議あるべき

も、吾人の卑見を以てすれば、左の三方面より、爲さゞるべからずと信ず。

歴史上、　經濟上、　技術上

蓋し、港灣改修の事たる、經濟上の見地より、出發すべきものなること、固より論を俟たずと雖も、歴史上の因襲を閑却すること能はず、亦、技術上の意見をも、斟量せざるべからず。此の三方面たる、互に相關聯して、分離すべきものにあらざるを以て、一邊に拳々偏著して、他方面に冷淡なることを容さゞるなり。由來、港灣説といへば、世人、直に輕事の如く思惟し、之を重要視するもの、極めて鮮少なりと雖も、我が函館の隆替は、港灣に由りて卜せらるゝことを知らば、此の港灣調査の事たる、區の大務にして、此の業一定せば、實に、我が函館の長福たること、已に炳然として明かならずや。夫れ、此の業の關係する所の重大なること、此くの如きものあると共に、其の調査の範圍の廣大にして、其の事體の糾紛、參錯せる、亦、前述の如きものあり。故に區に於ける、最高の調査機關たる、調査委員會なるものゝ組織を、今一層擴大し、其の門路を今一層開廣し、時務に通ずる、各種の眞賢、實能の人士を、普く網羅し、宜しく、衆智を合せ、群力を萃め、以て、港灣調査に對し、遺漏なきを期すべきなり。

遮莫、吾人は、是くの如き、重難の事業に對する責任を、悉く港灣調査委員に嫁し、港灣の荒廢を以て、全く彼等の怠忽過愆に歸せんと欲するものに非ず。區民と雖も、亦、均しく、平昔、港灣に對し、冷淡なりし罰責を、受くべきものにして、獨り、患咎を港灣調査委員のみに歸し、委員のみを峻責痛詆するが如きは、蓋し、思慮あるものの所爲と云ふべからず。元來、港灣の隆興を圖るには、宇内の大勢に鑑み、時世の進運に伴ひ、拮据勵精、改良に加ふるに改良を以てし、務めて、競爭港に、其の繁榮を奪はれざるにあり。我が函館は歐亞の中心に位し、大圏航路たる、津輕海峽の要港にして、天下の衝に當るを以て、施設、如何に由りては、其の伸張、發展、日を指して期すべし。區民たるもの、何人たるを論せず、造次顚沛の間にも、此の港灣の改良、發達を圖ることを忘るべからず。惟ふに、四通五達の要衝たる我が函館は、天時、地利已に之を得たりと謂ふべく、今や俟つ所のものは、

唯人和なり。されど、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かざるは、孟子、既に之を曰へり。若し區民が、力を協せ、心を同うし、茲に、孟子の所謂人和なるものを、盡すに非ずんば、天時あり、地利ありと雖も、我をして到底、世界の商港たらしむること能はざるなり。されば、港灣調査委員の、今一段の勵精を要することは勿論なれど、區民に於ても、專ら港灣調査委員、若くは當局の官公吏のみに依賴して、唯だ直だ、彼等を深責することなく、港灣の荒廢は、延いて鄕土の殄瘁と、身家の衰替とを招き、而して又、港灣の改良は、卽ち、區の殷阜と、己私の富厚とを來たす所以なることを自覺し、常に港灣問題に對し、攷究を怠らずして、各自、契闊、思を勤め、以て、區の爲政者、及び港灣調査委員の、罅漏を補苴する所あるべきなり。此くの如く、上下、士民、塗を殊にして、歸を同うし慮を百にして、致を一にするは、是れ實に、孟子の所謂、人和を得る所以にして、而して亦、函館をして、世界の商港たらしむる所以なり、而して、抑も亦、是の如くならざるべからざるは、港灣に依りて、叩足する區民の、當然の義務に非ずや。

區の立法府の怠慢に就ては、吾人、既に之を述べたり。其の旨を承くる區役所が、之に對し冷淡なればとて、深く論話するに足らざるに似たりと雖も、斯かる區の重事を等閑に付するは、區役所の爲め、亦、吾人の大に遺憾とする所ならずんばあらず。勿論、倫敦の如き、大規模の港灣廳を設くる必要なかるべきも、港灣を以て生命とする我が函館は、少なくも、其の區役所內に、港灣係なるものを設けて、常に港灣の調査に、從事せしむる要なきか。遮莫、之が細節に涉りては、別に識者に於て、卓見の存するものあるべきを以て、吾人は、茲に、敢て喙々せざるべし。

予輩は、苛細繁委に失することを恐るゝが故に、此に、輓近、歐米に於ける、港灣改修の事蹟を、諄々、語言する所なかるべしと雖も、心少く世務に存する者は、略ぼ之を推測するに難からざるものあるべし。夫れ戰捷の運に向ひ、國民の意氣勃然颺擧せる、歐米諸國は、經濟上に於ても、必ずや、勝ちを好み、强きを爭ふて已まざるべく、方今、經濟上の大動脈たる、港灣、航運に對し、彼等が、其の精を勞しつ

つあること、實に吾人の驚神駭魄の外なきものあり。然り而して、戰後、世界の經濟上の角逐は、必ずや、太平洋上に於て、演ぜらるべく、今や、且に、史家の所謂、太平洋時代(The Pacific Era)に、入らんとしつゝあるに際し、區民たるもの、此の港灣を輕忽慢易し、苟且疎闊を事と爲し、我が函館の艱危を、坐視することを得べきか、吾人は切に、港灣に對する、區民の自覺を、促さゞるを得ざるものなり。港灣に對する、區民の感寤、覺醒は、是れ實に、我が函館を、危墜、顚頓の中に拔いて、豐樂、平泰の地に置く所以なりと知るべし。(大正七年二月稿)

愛鄉心

吾人の、玆に愛鄉心と謂ふもの單に、自己、生誕の鄉閭を思念するに止らずして、自己の止住、所在する、都市町村を愛護する謂なり。約言すれば、函館の住民が、其の生地の何處たるを問はず、一致協戮、以て我が函館を愛護し、此の函館の爲めに、心力を盡すべきこと是れなり。蓋し、自己の呱して育ち、髫して嬉れし地ならずとするも、吾れ居を此處に定トする以上、是れ則ち吾が第二の故鄉にして、此の土の隆富、繁榮と、住民相互の幸福、安全とを企圖すべは、是れ則ち、吾人、當然の義務なればなり。然り而して、吾人は又愛鄉心が、愛國心の基礎たること、愛鄉心の缺乏は、卽ち愛國心の薄弱を、說明するものなることを忘るべからず。吾が畏敬する友朋、函館圖書館主事、岡田健藏氏は、箕裘の業を棄て、牙籌を拋擲して、流俗の富貴、榮譽を謝絕し、專ら、社會敎育たる、圖書館事業に盡瘁し、且つ、鄉土の歷史研究、愛鄉心の鼓吹を以て、己が任と爲し、或は筆に、或は舌に、十年一日

の如く、區民を教育し、區民を啓發し、孜々吃々、倦むことを知らざる篤學貞介の士なり。君自ら圖書裡（トショリ）と號す、蓋し、常に圖書山積の裡に、廓然獨居し、彼の名利に役々たる世人を、白眼視し、恰も活社會と疎闊せる、所謂、年寄（トシヨリ）輩に類する故なるべし。予輩は、氏が壯齒有爲の身、英特俊邁の材を有しながら、徒に故紙堆中に韜晦し、自ら、老耄の年寄輩に比することを、深惜する念に堪へざるものなり。然りと雖も、氏を以て、一向、殘楮敗墨の間に汨溺する、村學究と爲すものあらば、亦は大に誤れり。氏や殊操を秉り、當世に求むる意なしと雖も、函館の利害、區民の得失に於ては、常に其の間に隱憂することあり。其の懷抱する、函館經綸の策の如き、頗る世人の傾聽するに足るもの多く、人若し其の底蘊を叩いて、區の疵病を議せしむることあらんか、闇々侃諤、區の釐革振作すべき事體を論じて、常に鑿々、竅に中る。先民曰はずや、儒生俗士、豈に時勢を識らんや、時務を識るものは俊傑にありと、然らば則ち氏の如きは、彼の儒生俗士なるものと、全く科を殊にするや又、已に明かなり。書に云ふ、孝か惟れ孝、兄弟に友に、有政に施すと、氏の如きは區政に與聞し、之を執掌する所なしと雖も、區政に對する、其の功、豈に遽に彼の務むる所、刀筆、筐篋に在りて、大體を知らざる、方今の區の所謂、大官豪吏なる者の下に出づべき。若し夫れ、史學家の誘導啓發が、曾て、獨逸民族の勃興、獨逸聯邦の統一を促進する上に於て、如何に顯著なる效果ありしかに想到せば、予輩、豈に敢て、岡田氏の歷史、及び愛鄉心に關する功勞を、湮滅せしむるに忍びんや。獨逸民族が、此等、史學家の功效を遺却せずして、所謂、國民的史家の敬稱の下に、彼等を旌別し、彼等を崇禮し、其の偉勳を頌し、其の豐功に報じ、彼等、史學家をして、存して顯號あり、亡して美謚あらしめたるは、吾人の大に欣快、禁ずること能はざる所なり。飜て意ふに、我が函館區民にして、岡田氏の功績を思念し、岡田氏に感謝の意を懷くもの、果して幾人かある。勿論、之れあると、之れなきとは、朴淡委蛇、物を逐ふこと勿く、己に矜ることなき、岡田氏に於て、毛髮、益損する所なかるべきも、德を表はし、功を章かにするは、古今の通義にして、世を率ゐ、俗を厲す所以、然るに氏の如き有功者に對し、冷淡なるは、決して、

區民の名譽に非ざるべし。吾人は潔白の士を顯はし無欲の路を照かにする所以の、遂に闕爾として聞くところなきを、區民の爲めに遺憾とす。由來、武功に厚うして、文勳に薄きは、我が國の通患なり。佛國の如きは、文藝家にして、名譽勳章レジョン、ドノールの、敍勳に與かるもの、殆んと枚擧に遑あらず。英國に於ても、亦然り、彼等にして旌揚を被り、乃ち淮男爵(ナイト)を受くるもの寡少なりとすべからず。然るに、我が國に於ては、文藝家を待遇するに、從來、如何なる方法を以てせるか、吾人は唯酷薄の一語を以て、之を蔽ふことを得べきのみ。岡田氏が、斯かる社會の閑却、區民の冷遇の裡に、功名、富貴を棄ることを視る、猶ほ敝蹤を棄るがごとく、丘園の幣を吩ずして、軒冕を泥塗にし、其の產を蕩盡し、其の家を破耗し、隱忍以て、鄉土の研究、愛鄉心の涵養に餘念なく、窮年兀々、倦まず、愠らず、怍ず、沮まざる、其の孤芳、皎潔なる心事、吾人の深く多とせざる能はざる所なり。予輩は、愛鄉心の養成に於て、今後、益々氏の勞に待つべきもの多きを思ひ、且つ、霄漢、心あり、必ずや氏の功に豐報することあるべきを信じ、一層、氏の奮勵努力を希冀して已まざるものなり。

大凡そ、愛國心の熾盛なるものの、佛國人の如きは、其の尤たるものなるべく、亦、愛鄉心の熱烈なるに於ても、先づ指を巴里人(パリジャン)に屈せざるを得ざるべし。宜なる哉、頽廢(デカダン)の風潮、國內に彌漫、浸漸せるやの觀ありて、且つ、人口の增加すること少く、常に之れが減少を憂慮する狀態なるにも拘らず、猶ほ一等國の體面を維持して、雄を一方に稱し、殊に其の文化に至りては、郁々斐々として、芳を吐き烈を揚げ、世界の中心たる譽を擅にす。首都巴里の如き、富庶殷賑にして、壯麗を極め、華美を盡し、天下の雄都、世界の樂園と稱すとも、溢美に非ざるは、萬目の睹る所なり。夫れ崇臺は一幹に非ず、珍裘は一腋に非ず、固より其の玆に至る、從來する所遠く、因緣する所、一ならざるべく、果して、幾人の力、幾日の功、扶持、保衞して斯に至るかを知らずと雖も、是れ實に、佛人の卓絕せる愛國心、愛鄉心に因る所多きは、疑を容るべからず。國家の富强、都市の繁榮は、職として、愛國心、愛鄉心の力に因るものなるは、言を俟たざる所なれど、邦人の此の理に闇きもの多

きは、甚だ遺憾なり、殊に區民の間に於て、此の弊、最も甚しきものあるは洵に痛むべし。吾人若し、佛人に鑑み、巴里人（パリジヤン）に鑑みなば、亦、照然、遠寤する所あるべきなり。歐羅巴は、世界に於ける最美の洲なり、佛蘭西は歐羅巴に於ける最美の國なり、巴里は佛蘭西に於ける最美の都なりとは、是れロスタンの戲曲、シラノ、ド、ベルジュラに云へる所、予輩、今、此の口吻を學ぶものに非ずと雖も、日本は坤輿に於ける最美の國なり、函館は日本に於ける最美の都なり、然らば則ち函館は、全球に於ける最美の都なりと、曰はんことを欲す。是れ、我が函館區民の希望すべく、謀圖すべく、盡力すべき所にして、之をして、單に一片の空想たらしめず、飽く迄、之を實現するに勗めすべきは、則ち、吾人區民の義務にして、以て前人の業を大にすべく、以て無窮の基を啓くべく、以て、慶を來裔に流すべく、以て、祖先、丘山の恩に報ゆべし。是れ所謂、眞に、報本反始の大義を全うする所以にして、愛鄉心の歸著する所、實に是くの如くならざるべからず。蒼々たる臥牛の山、泱々たる巴灣の水、此の穠麗明媚なる、山容水態を顧盼する毎に、吾人、常に

沛然として、思を此に致さゞることなし。

熟々惟念するに、霸（あした）、夕に及ばざるは、社會の常態にして、方今、東には、千數百萬の功費を糜して、港灣を修築せんとする室蘭あり、南方、一葦帶水の大湊には、八百萬圓の鉅資を擁して、以て、港內を改修し、倉庫、市肆、船渠等を建設せんとする、興業會社のあるあり、觀じ來れば、津輕海峽の覇權は、抑も孰に歸すべき。現今、我が函館は、風帆、浪舶の來往、織るが如く、居然として、雄を海峽に稱ふと雖も、今日の如く、區民が、久安に狃習し、偷惰、苟簡して、遠大の計、經久の策を爲さゞるに於ては、焉んぞ、久しく、利に敏に虎耽狼視する、此の二港と競爭して、駸々、之に駕軼することを得べき。吾人は恐る、歲年を經る幾何ならずして、竟に、長雄たる地位、覇者たる聲譽を、失ふに至らざるかと。斯く危まば、或は之を以て杞人の憂に過ぎずと爲すものなきに非ざるべけれど、深知明察、達觀通視の士は、必ずや壓頭疾首、一日も安んずること能はざる所なるべし。語に曰く、先發人を制し、後發人に制せらると、今に於て、區民が速に事を慮り、計を定め、進取の經營を爲

さば、蓋し、東隅、已に逝けど、桑榆、晩きに非ざるべけんも、趦趄、逡巡して、憧々焉、徒に曠日、經年することあらば、或は恐る、遂に、室蘭、大湊の後塵を拜するに至らんことを。且つ夫れ、憂勞、以て國を興すべく、逸豫、以て身を亡ぼすべしとは、是れ實に、天下の至言にして、古今の至戒なり。區民なるもの、安んぞ、優豫、愉佚して、安寢に耽り、長夜の夢を貪ることを得べけん、宜しく、造次、克く念ひ、戰兢、自ら持すべく、敢て怠遑する所あるべからざるなり。古人、言へらく、功の成るは、成るの日に成るにあらず、蓋し必ず由て起る所あり、禍の作るは、作るの日に作るにあらず、亦、必ず由て兆す所ありと、將來、我が函館の雄飛すべきか、將た雌伏すべきかは、唯、區民今日の覺悟如何に因て、之れを決し得べきのみ。夫れ、本道の喉咽、北門の鎖鑰に倚靠し、自然の形勝、天與の良港に依賴して、遂に、時を遷徙し、世と推移することを忘れ、而して、意、全局にあり、事、機先を貴ぶ理を知らず、又、勢に因り、變に應じ、時を相て弛張する明に乏しく、苟も其の本を捨て、瑣々然として、殆んと兒戲に等しき、姑息の小計を以て、一時を糊塗し、僅に懦々、自ら保ち、惟、他に侵されざるを以て、幸とするが如きことあらば、是れ、畢竟、我が函館の前途を誤り、噬臍頓足、追ふべからざる、悔を遺すものと云ふべし。此くの如く、盛衰興壞の岐路に立てる區民は、抑も如何にして、此の間に處せんとはする。其の人無くんば、則ち、山川形勢、地、之を與ふと雖も、而かも全うすること能はず、人の權や重い矣哉。夫れ區々の小謀、此に施すべからず、諸々、屑々たる者、以て恃むに足らず、顧れば、區の鈞を秉り、軸に當る耆宿、先達にして、識見あり、抱負あり、加ふるに愛鄉の心、烈々、火の如く、常に鄉土の務を以て己が任と爲し、力を勤め、心を勞し、斃て後已む概ある、誠心至意の士、果して幾許かある。吾人、寡聞淺聞、方今、其の人を見ること甚だ多からざるを遺憾とす。殊に戰亂に因り、偶然、暴富を致したる、所謂、成金輩の如き、堅に乘り、肥に策ち、絲を履み、縞を曳き、威容堂々、眞に畏るべき、搢紳の徒の如しと雖も、多くは是れ、眼前の小康に安んじて、雄圖大略を缺き、自己の私利に汲々として、區の福利を念とせざる、細人曲士に非ざるか。曩に、物議を釀したる、憲兵屯所迹、土地貸下問題の如き、是れ、區吏及び一部

區會議員なるものゝ、自己の公職に在ることを忘れ、國家の委任に負き、區民の屬望を無視し、只管其の自私自利を濟さんとして、肆行、顧るところなき、偸陋の徒に過ぎざることを、遺憾なく暴著せるものにして、區の立法、行政を掌るべき、神聖、侵すべからざる區會は、竟に鼠輩出で、鴟鴞號ぶ、魔窟の如き觀あり。吾人は、其の局に當れる區吏、及び、老姦巨猾の、一部區會議員等の、議場に於て、自己の瀆職を幾んと完膚なき迄に、爬羅剔抉せられたるにも拘らず、靦然、愧る所なく、飽く迄、其の職に固執する、梟獍の如き强顏に、駭惋せざるを得ざるものなり。彼等は曾て、紐育の市政を紊亂し、暴横を極めたる、タマニー、ホール(Tammany Hall)の徒と、殆んと選ぶ所なきものにして、公に託して、一切、私を營み、苟も己に利なる、敢て人言を恤べざるものなり。固より彼等と、雖も寸長片善の、之を認むべきものなきにあるざるべけれど、而かも、瑕、瑜を掩はず、瑜、瑕を掩はず、罪、功を掩はず、功、罪を掩はず、吾人、彼等の瀆職に對しては、飽くまで、之を糾彈せざるを得ず。噫、此くの如く、愛鄉心の絶無なるは勿論、行、汚にして、治に寄せ、身、私して、公に託する、斗筲の輩に區政を託し、斯くして、外は以て、此の難局を處置し、內は以て、區勢の伸張を規畫せんことを欲す、是れ恰も、湯を以て沸を止め、薪を抱いて火を救ふが如し、愈々甚だ益亡きなり。嗚呼、深計遠慮の先輩は、落々として日に稀に、先憂後樂の長者は、靡々として愈々索き、而かも、至誠、鄉土を愛する曠士貞固、以て事を幹するに足る後進に乏しきは、是れ實に、區の一大憂患に非ずや。吾人の永く嗟慨し、永く嘆喟し、痛哭、流涕、已まざる所以のもの、實に玆にありとす。

郵船會社函館支店長、松平市三郎氏は、客臘を以て、來函、任に蒞みたる人、今年々頭に際し、正色莊語、社員に、一場の訓誡を爲して曰く

此次の歐洲の兵鋒は、却て福祉を我が北海道に齎して、拓殖の進歩、產業の發達、海外貿易の勃興を促し、函館に於ても、小樽に於ても、海產、若くは陸產の、海外輸出は、曩時に倍蓰し、什佰し、或は千萬し、殊に陸產物、輸出の驚くべき暢旺は、從來の主要物產たる、海產を後へに瞠若たらしめ、而して、今や本

道の物産は、世界の市場に、大歩し闊歩するに至れり。是れ實に、内外人の拭目して視る所、我が函館の如き單に本道内地間の通商港たるのみにあらずして、海外貿易港として、嶄然頭角を見はすに至りぬ。今や、日本の函館に止まらずして、一躍して東洋の函館となり、再躍して世界の函館となれり。吾人須く、其の希望を高うし、其の抱負を大にし、其の眼孔を闊大し、其の胸襟を開廣し、世界風の態度を以て、事に臨まざるべからず。顧れば、目下、長萬部鐵道、敷設の企畫せらるゝありて、之が竣功の曉には、啻に本道開拓の上に、顯著なる效果を見ることを得べきのみならず、我が函館の如き、此の鐵路の膏澤に由り、舶用炭水の供給を、全うすることを得べく、大圜航路たる、津輕海峽の要衝に當る、我が函館は、今後、益々世界の商港として、歐亞の間に、角逐せざるべからざるに至るべし。果して然らば、將來の函館は、洵に多事多忙と云ふべく、吾人、一日隻時も、安逸偷惰することを容さざるものあり。予輩、不肖と雖も、職を受けて、此に在る以上、正心誠意、此の

郷土を愛し、此の郷土の昌阜繁榮の爲めには、其の耳目を竭くし、其の心慮を殫くし、此の郷土の富庶、豐殷の爲めには、其の渾身の勇を揮ひ、其の畢生の力を注がざるべからず。希くは諸君と與に俱に、愛郷心を鼓舞振作して、協戮一致、以て此の函館隆興の爲めに、奮勵する所あらん。

と、其の函館を愛する熱情、淋漓として、言面に流露し、聲涙、ともに下る概あり、列座、爲めに感奮興起せざるものなかりき。嗟乎、此の郷土を愛するや深く、此の郷土を思ふや至れる、是くの如き、肺肝を吐露せる、懇到、切摯の言詞は、吾人、之を區の先進老宿に、聞かんと欲して聞くことを得ず、却て住在、纔に朞月に滿たざる、松平支店長によりて、之を聞くことを得たり。是れ吾人に取りては、青天の霹靂とも稱すべきか、將た、大旱の雲霓とも謂ふべきか。此の社員に對する松平氏の戒飭は、移して以て、動もすれば、保守、退嬰に傾き、因循、姑息に陷らんとする、區民を風勵し、之を匡敎訓誘するに足るべく、其の游惰に策ち、氣力を興さんとする、藥石を窮むる言、若し區民、之を味はゞ、津々然、滋旨を含むが若きものあ

るべし。殊に率先、奮挺、愛鄉心の振興を、唱道して已まざるが如きは、洵に、我が函館の時病に的中せる、剴切の處措にして、殆んと、良醫の鍼砭の、分毫爽ふ所なく、能く沈痼を活暢するに足るが如きものあり。吾人は、氏の最も切なる、此の藥石、此の鍼砭に對し、豈に深く、感謝する所なくして可ならんや。然り而して、予輩は、此くの如き、恢厚、純誠の士を、我が函館に迎ふることを得たるを衷心より悅ぶと共に、愛鄉心に乏しくして、自ら彫瘵する區民の、氏に對し、果して、慙恧せざることを得るかを疑はざるを得ざるなり。

世人、或は、北海道の如き、新開の土地に於ける、愛鄉心、涵養の、至難事たるを、說くものなきに非ざらん。然りと雖も、是れ思はざること甚しきものなり。獨逸の首府を初めとし、北米の大都市は、大率、新聞の都會にして、此等の都市は、半世紀以前に於て、人煙稀薄の、荒涼寂寞たる、窮鄉僻邑に過ぎざりき。然らば、此等大都市の市民が、悉く愛鄉心に乏しくして、其の都市を視ること傳舍の如きかと云ふに、大に然らざるものあり。中には、其の愛鄉心の旺盛なること、吾人の

取て以て、範と爲すべきもの少なからず。畢竟、愛鄉心の有無は、其の市町村の歷史の、新舊如何に關するものに非ずして、其の住民の自覺、如何に存するのみ。其の住民が、自己の居住する市町村と、緊密の關係を有することを辨へ、市町村の經營は、住民各自の、與に俱に、任せざるべからざることを、自覺するに於ては、自ら利は、卽ち市町村の利、市町村の害は、卽ち自己の害なることを悟り、自己の愛鄉心なるものは、醱酵し醞釀するものにして、是に於て乎、住民は、市町村、慶あるときは、之と、其の害を共にするに至りて、之と與に、其の利を饗け、市町村、憂あるるべし。如何なる新開の都市と雖も、住民にして、一度、此の自覺の境に至らんか、愛鄉心の勃然、振興せざらんことを欲するも、得べからざるなり。されば、彼の故鄉に、依々として眷戀、纏綿たるは、聖愚、共に、之を失はざる、性情なれども、眞に其の鄉土を愛し、眞に其の鄉土の福利を圖る、所謂、愛鄉心なるものは、鄉土、名望家の誘啓と、鄉民、各自の修養とに待たざるべからず。是れ、此の多事、多難、我が函館の運命を決すべき、艱危の秋に際し、吾人は切に、區の有識、長老の覺醒を

促すと共に、區民各、自に於ても、自ら奮ふて、愛鄉心を振起し、以て與に共に我が函館隆興の大策を規畫し、之に向て、一齊に、全力を擧げて、活動せんことを、希望して已まざるものなり。若し夫れ、十三萬の區民が、悉く、熱烈なる愛鄉心を有するに至らば、則ち危も平にすべく、難も解くべく、亡も存すべく、彼の、室蘭、大湊の勃興の如き、亦、恐るゝに足らず。津輕海峽の覇權は、永く我が掌握する所にして、我が函館は、恆久、北日本に雄飛することを得べし。而して、區民は、雍熙を共にし、饒衍を同うし、樂土樂土、爰に我が所を得たりと、欣樂するに至らん。嗚呼、愛鄉心なる哉、愛鄉心なる哉。（大正六年十月稿）

棧橋問題

併て故山田區長を弔す

貨物の裝起、旅客の上下を掌るべき、棧橋、若くは停車場なるものは、交通機關の中に於て、最も重要なる、地位を占むるものにして、其の設置、變更は、殆んと、都市の中心を形成、遷移するに足るものあり。されば、此の問題の起るや、其の土地の住民が、之に熱中して、狂奔すること、寧ろ、理の當然と謂ふべく、之に對し、風馬牛相及ばざるが如き、寡智の民人は、今日、文明國の何處に、覓むとも、之を見ること能はざる所ならん。

我が函館港に於ける、物價の裝起、旅客の上下に就ては、岸壁、棧橋、其の孰を選ぶべき、將た、兩者、併て、之を用ふべきか。固より、兩者、之を併用することの、便好なるは、言ふ迄もなきことなれど、區の目下の財政は、之を容さゞるものありて、彼の岸壁の如き、其の、貨物の裝起に利便なること、棧橋の匹にあらずと雖も、是れ

亦、區帑の關係上、今、猝かに、之を實現し得べくもあらざるに似たり。是に於てか、吾人は、往年、區會に提出されたる、前區長、山田邦彦氏の、棧橋案を、時勢の求須に應ずべき、最も機宜を得たる、良案なりと思惟し、此の案の否決を、山田氏と共に、我が函館の爲めに、轉た、歎恨せざるを、得ざるものなり。

夫れ、天地、大文、往くとして、妙ならざるはなしと雖も、井に坐して、之を觀ると、高きに登りて、之を矚ると、其の見る所、固より、侔しからず。されば、彼の山田區長の棧橋案の如き、淺見者より、之を見れば、附贅、縣疣にして、其の用なしと爲すべきも、卓見の士より、之を見れば、必要、缺くべからざる良圖、切當、易ふべからざる至策とせん。人に智愚賢不肖ある以上、事の茲に至るべきは、蓋し免る能はざる所、敢て、異しむを須ゐざれども、但だ、吾人は、碌々たる庸人の爲めに、山田區長が、遂に制せられ、功、隳れ、業、廢するに至りたることを、千秋の遺憾と爲すのみ。隋和を觀るものは、必ずしも珍と爲さず。世人、或は、故山田區長の、棧橋案を評して曰く、此の案たる、其の規模、頗る褊小にして、以て、世界の商港たる、我が函館

の、進運に伴ふべき、萬世の長策と、爲すべからず。且つ、此の案の否決せらるゝや、鐵道院に於ては、別に、棧橋を築造する所ありたるが故に、物貨の運輸、旅客の來往に就ては、何等、不便を感ずる所なし。されば、山田案の廢棄に對し、區民は毫髮、悲むべき、理由を見ずと。然りと雖も、此れ、疎大なる、書生、紙上の空論に過ぎざるのみ、何ぞ、時務を識らざることの太甚しきや。夫れ巧匠、之を劉すと雖も、矇瞍は、其の揆正を察せず。山田區長の、此の百代の鴻猷が、憤々者流の爲めに、不幸にして、輿論なる美名の下に、否決せられたるより、既に十星霜、吾人は今、尙ほ倍々、之を以て、我が函館の、最大痛恨事と爲し、慨悵、傷嗟して、已まざるものなり。當時、區會に於て、函館港、改良の先務たるべき、此の山田氏の、棧橋築設案が、何故に、左右支吾、竟に其の實行を阻撓せられたりしか、是れ區民は、恰も、自ら好んで、坦々たる康莊、大道を舍て、荆棘の傍蹊、曲徑を、歩みたるが如きものにして、其の理由、殆んと、予輩の解了し得べからざる所、當時の、區會議員なるもの、心中、吾人、之を忖度するに、苦まざることを得ざるものなり。且つ、夫れ、人の性

たる、食あり而して又、其の精を欲し、衣あり而して又、其の華を欲し、宮室あり而して又、其の壯麗を欲す。然るに港灣を有し、而して又、其の港灣に因りて生活し、且つ又、港灣に由りて、其の生を厚うし、其の家を富ますべきにも拘らず、其の港灣を修治し、其の港灣の完全を、期することを思はざるは、是れ、小を顧て、大を忘れ、本を舍てゝ末に趨るもの、其の類を知らざるも、亦、甚だしと謂はざるを得ず。意ふに彼等議員は、私に狥じ、利を謀り、公義を廢せるか、或は、十年後の今日を、逆め料る明なかりしか、將た眼前の小康に安んじて、遠大の計を爲すの勇を缺きしか、死屍に鞭つに類するものあるを以て、吾人、今、之を追究せざるべしと雖も、棧橋案、否決の結果、現在我が函館が、被りつゝある損害と、區民が受けつゝある不利とに對しては、當時の議員たるもの、如何に强辯すとも、遂に其の譏責を逭る能はざる所にして、區民をして、其の生を厚うすることを得ざらしめ、區をして、蹙迫、槁乾するに至らしめし、懈怠と、失計とに就ては、當時の議員たるもの、如何に曲說すとも、到底、其の郵罰を免る能はざる所なり。若し彼等にして、之を糾問せらるゝに値はゞ、必ずや、額忸怩とし、口囁嚅して、踴天蹐地、身を措く所なきに至るなるべし。

案ずるに、山田氏案なるものは、船場町九番地前の海岸より、延長百間、幅員八間の、鐵製棧橋を、海面に向て築造し、二千噸内外の定期船を、繫留することを得せしめ、船車の連絡を計るには、若松町停車場より、鐵路を棧橋に延長し、以て、海陸の聯絡を全からしめ、貨物の運輸、旅客の往來の、便捷、安全を圖り、而して、乘船、上陸の旅客を招徠し、又、區の物貨の運行、散聚に便せんとするにありき。此の案の最も有利なるは、現在の鐵道院棧橋の如く、專ら東部に偏せず、區の商業地にして、區の中樞たる、街衢に密邇せるが故に、此處に於て、裝貨し、起貨し、亦、旅客も此處に於て、船車に上下するを以て、最も便好なりと爲すにありたり。然るに、鐵道院棧橋は、區の東端に位し、殆んと、商業區の圈外に僻在する觀ありて、諸官衙、銀行、諸會社及び豪商、大賈の舖店、若くは、諸倉庫の所在の地域と隔絶し、旅客の乘船、上陸の不便は勿論、一旦、此に卸されたる來貨も、各自の舖店、倉庫に搬運

するが爲めには、更に、車輛若くは艀舟の力を藉らざるべからずして、其の間に、許多の時間と、許多の勞力と、許多の費用とを、徒費せざるを得ず、而して、物貨を輸出するに當りても、亦、同樣の不利、不便を蒙らざることを得ざるものなり。要するに、鐵道院棧橋なるものは、本道、內地間の、船車連絡を、其の主眼とせるものにして、我が函館區民の利便の如きは、其の初始より、顧慮する所にあらざりしに似たり。蓋し、鐵道院より見を起さば、斯くあるべきは、寧ろ、理の當然にして、其の慮る所、常に、大局の上にあるべく、函館の盛衰、區民の便否の如きは、全體の上より打算して、別に意に介せざりし所ならん。乃ち、鐵道院棧橋は、專ら、院船のみを繫留せしめ、他の使用を淮(ゆる)さず、故に、院船以外の一切の船舶は、秋毫、其の惠澤に沾ふこと能はざる所なり。人をして、己に依らしむとも、己、人に依るべからずとは、先民の既に道破せる所、實に天下の名言なり。然るに、區は、己が計を、泥滯苟且して、己れ自ら之を爲さゞるのみか、濫りに、鐵道院棧橋に對し、其の餘光を求むと欲す、亦、信に、愚の至り、陋の極みと謂ふべし、夫れ、只管、他に攀援

依附せんとする卑屈の心は、區民の、斷然、之を棄てざるべからざりし所なり。噫、自ら多福を求むること、我に在るのみ、鐵道院、何んぞ爲さんや。若し、當時の區會が、山田區長の意見を聽納し、氏の建畫にかゝる、棧橋を竣工せしむと假定せんか、函館區民は、前述の不利不便を免るゝことを得べきのみならず、區の中心たる、濱町、末廣町、船場町方面は、棧橋の築造に因り、其の繁華、今日に倍蓰するものあるべく、大厦高樓、輪囷奐爛として、粉壁、雁甍、鱗次輝暎し、車馬絡繹、士女雜沓して、肩摩轂擊する、其の壯觀、世人をして、嘖々、善美を艶羨せしめ、我が函館の中心として、名實、虧廢することなかりしならんに、惜むべし、遠大の計、達觀の明なき、嗇目の徒の爲めに、港灣政策を誤り、遂に拔くべからざる、深患を胎すに至れり。嗟夫、功は成り難くして、敗れ易し、吾人は、之を以て、區の衰替の權輿なりと斷せんと欲す。

惟ふに、我が函館港の中心たるべきは、仲濱町、稅關方面より、船場町、郵船會社附近に至る間の、海岸にあることは、從來の定論にして、何人も異議なき所。蓋し、

此の間の海岸は、區の喉咽にして、區、商業の中心に位し、總ての機關、此處に具備せるを以てなり。山田氏の棧橋案が、之に準據して、基點を、船場町九番地前の海岸に定めたるは、最も其の當を得たるものなり。區が、棧橋、若くは岸壁を築造するに當り、其の位置を定むるに際しては、將來と雖も、必ずや、此の案に規倣せざるべからざることは、疑を容れざる所なり。然るに、鐵道院は、區の利益よりも、自院の便利を主とせるが故に、棧橋を、直に、若松町、停車場前の、海面に設けたるものにして、之れが爲め、區民の不利不便は、前述の如く、莫大なるものあるのみならず、區の中心たる街衢の衰替を招き、加之、區の西部街坊一般の不振を來し、却て、般賑を東部に遷徙せしめ、若松町、停車場附近をして、異常の發達を遂げしめたり。今後、我が函館の發展すべき餘地は、對岸の上磯、七重濱方面にして、倉庫、工場等の、同方面に徐々に建築せらるゝに至るべしと爲すとも、全く、架空の想像に非ざるべく、要するに、區の東部が漸次發展すべきは、自然の趨勢にして、敢て、異とするに足らざれと、停車場附近の、倏忽たる發達は、畢竟、鐵道院棧橋築造の結果、區の中心より繁榮を奪ひ、之を東部に遷したるものにして、區の全體より觀察すれば、不具の發育たるを免れず。吾人は、東部の發達を喜ぶと雖も、區の中心たる、東濱町方面、及び區の西部諸街坊の衰微を歎じ、區の畸形の發育を悲むものなり。人、或は曰く、將來、區が、七重濱、上磯若くは湯の川方面に、發展するに於ては、區の中心は、當さに若松町、停車場附近に移徙すべく、隨て、現在の棧橋は、目下、多少の不便を免れざるべきも、將來に於ては、適當の位置たるに至るべしと、是れ、一見、其の理あるに似たりと雖も、審かに考覈するに於ては、吾人、之を首肯すること能はざるものあり。先づ、湯の川方面に就て、之を見んか、同方面の目下の駸々たる發達は、世人の觀駭する所なりと雖も、元來、同方面たる、區の背脊に位し、閒靜なるが故に、住宅區、若くは工業區に適すべきも、商賈區たり得べきに非ず。然らば次に、七重濱、上磯方面は如何、意ふに、同方面の將來の開發は、全く不可能のことにあらざるべしと雖も、該方面は、工場、倉庫等の建設に、或は可ならざるにあらざるべけれと、住宅地として適當ならず、殊に事

務地と爲すが如きに至りては、一層不便ならざるを得ず、港内に面すと雖も、商業地たらしむるが如きは、亦到底望み得べからざるなり。且つ、竊かに諦觀するに、對岸、七重濱、上磯、方面は、漂沙堆積して、水面平靜を缺き、二三百石積の貨艀すら、尙ほ、碇繫荷役するに容易ならず、風波、少く起るも、忽ち、荷役を中止せざるべからずして、風勁く、浪高き、冬候の如き、殆んと、艀の囘漕、貨物の裝起(つみおろし)を、停廢せざるべからず。されば、同方面に、營業倉庫を建築せんとするは、現今の狀勢を以てすれば、頗る無謀の擧と謂ふべく、要するに、同方面に、倉庫、工場等の櫛比するに至るが如きは、旦夕に實現し得べくもあらずして、前途猶ほ悠遠なりと、言はざるを得ざるなり。此に由て之を觀れば、湯の川、若くは、七重濱、上磯、方面が縱ひ、將來、相當の發達を遂ぐるとすとも、貨殖、此處に遷引して商旅、稠を連ね、隱隱展々たるに至るべしと做すが如きは、蓋し荒遠、寥廓の談のみ。斯かる實狀なるが故に、若松町、停車場附近の、直に、區の中心たるに至るべしと爲すは、大早計たるを免れざるなり。而して、又、區の中心を、歷史上の因襲を顧ずして、强ひて、人爲を以て、停車場附近に、轉移せしめんと圖るは、大に區民の考慮を要すべき所なるべし。之を要するに、區の、今日不具たり、尪弱たるは、當時の區會が、山田區長の至當易ふべからざる良圖を、采納せざりしに因るものにして、予の以上記述せる所に由り、讀者は之を首肯し得べし。

人、或は、山田區長の棧橋案の規模の頗る褊小なることを、言ふものありと雖も、是れ畢竟管窺、蠡測の、淺狹の見に過ぎざるのみ。此に由て、以て、區勢を雄長せんと謀れる、此の棧橋案に對し、人、誰か、其の規模の壯、其の規模の大を望まざるべき。然りと雖も、其の時勢の如何と、之に伴生する、財政の問題とを考慮せずして、唯だ直だ、其の壯、其の大を欲するは、決して、其の策を得たるものと云ふべからず。彼の徒に、天下の形勢を云々し、最初より、漫然、其の尨大を求め、斟酌、損益することを知らざるが如き、是れ却て、庸愚の議論にして、甚だ計に非ざるなり。何故に、山田氏が、區會に於て、棧橋案を單提し、而して、棧橋を立案するに當り、旅客を主として、貨物を從としたる、是れ實に、愚暗の、動もすれば、以て、規模褊

小と爲し、之を識る所以なれど、山田氏の、方寸の中には、別に、深圖遠算の存するものありしなり。惟ふに、故山田區長の志意は、港灣改良の第一歩として、先づ、定期船を繫留すべき、棧橋を築造して船車の連絡を圖り、以て、本道の喉咽、北門の鎖鑰たる實を擧げ、而して後、第序を追ふて、岸壁若くは横棧橋を築造し、斯くして、徐々に港灣設備の大成を期し、以て、我が函館を、世界の商港たるに至らしめんとしたるや、明かなり矣。蓋し、明治四十年の大火罹災の時に當り、財貨百物、焚燬空竭し、公私、窘乏せる、區の事情よりせば、一階、一戸すら、澶りに躊ゆることを、許さゞるものありしを以て、序を追ひ、次を逐ふて、一歩々々、進行せんとしたるものにして、其の深計密慮、寔に、人に出づること千百等。嘗、されど、此れ、豈に、世士と言ひ易からんや。

彼の、鐵道院棧橋の如き、院船專用に屬し、且つ、築造以來、未だ十年に滿たずと雖も、其の利得の多き、既に、建設費を償却し得て裕如たりと稱せらる、其の豐贏の業たる、以て知るべし。若し、山田氏の棧橋案にして、區會の聽用する所となり、

竣工せりと假定せんか、此より生ずる利得、夏かに、鐵道院棧橋を陵駕するものあるべく、而して、建設費の如きは、速に、還清し得べきのみならず、其の以後の、毎歳の莫大なる贏利は、畢く、區の收入となり、本道の日升月恆の如き開發に伴ひ、其の利得は、洪源の如く混々として、愈々益々增加すべし。區の財政上より之を見るも、絶だ有利なる事業たるや、疑なかりしなり。然りと雖も、是れ、亦、數理の念に乏しき、疏糲の士の、豫め、之を權ることを能はざりし所なり。

當時、區の立法府が、此の案を否決せる理由は、實に、時機、猶ほ未だしと云ふにありき、然れども、當時、區會に於て、此の案の否決せらるゝや、鐵道院は、之を使用する望、全く絶えたるを以て、直に、連絡船を繫留すべき、自院專用の棧橋築造を企畫し、若松町海面一萬有餘坪の借用を出願せり。是の時に當り、棧橋の必要なることは、官民共に、之を認視せる所にして、海陸連絡の局に當れる、鐵道院の如き、最も之が築設の緊急事なるを、痛切に感じたるもの、故に、區が之を爲さゞるを見るに及び、遂に、自ら進んで、自院專用の棧橋築造を、企圖したるなり。斯か

る狀勢なるにも拘らず、區の立法府に列する、庸々斗筲の輩が、時機、猶早の藉口の下に、否決し去りたるは、予盾撞著も、亦、甚しと云ふべし。蓋し、當時の議員は、此の區の大事に遇ひ、卽ち便ち、奉滯紛擾、復た、辨議宰制すること能はずして、卒に斯かる口實を設けたるもの、彼等の之に對し、時機、猶早を云々するが如き、畢竟、夏蟲、氷を語るに類するのみ。

吾人は、今日に於て、倍々、故山田區長の、識高、慮遠に佩服すると共に、當時、計熟し、謀定り、將に實行せられんとしたる、此の折衷、至當の棧橋案に對し、左顧右盼、躊躇決すること能はず、一議毎に、一難を設け、延期に次ぐに延期を以てし、遂に廢棄するに至りし、區會議員の因循姑息には、深く嗟慨、憤歎するものなり。先民曰く、決して敢て行はざるものは百事の禍なりと、吾人は、其の餘殃、流毒が、近時に於て、益々我が函館に禍するを見、轉た往を傷み、來を憂ふる情に堪へず。要するに、當時の議員は、壺中の天地に偃蹇、盤踞して、獨斷、自ら智とせるもの、形勢を揣摩して、長計を策するが如きは、之を能くし得べきにあらざりしなり。

されば、此の棧橋案に就ても、其の得失を、較量、判斷する尺度、彼等の方寸に存せるに非ず。故に、彼等は之に對し、汎然として議し、忽然として罷め、汗漫、荒忽、歸宿する所なかりしのみ。蓋し、彼等は與に成を樂むべきも、與に始を慮り難かりしなり。嗟虖、黍離の嘆は、輿台、牧圉と雖も、共に之を悲む、然れども、銅駝、荆棘を、全盛の時に見るが如きに至りては、卽ち機を知るものに非ずんば、能くすることなし。

然り而して、之を毫釐に失すれば、謬るに千里を以てす。十年以前、已に既に、其の港灣政策を誤りたる、我が函館區民は、爾來、之が爲め莫大なる損害を、蒙りつつあるにも拘らず、仍ほ、幡然、其の非其の害を感悟せずして、今に至る迄、酣寢、沈醉の中にあり、是れ、所謂、蓼蟲、葵薫を避け、苦に習ふて、非を言はざるものか。吾人豈に、之を見て、愾然として大息せざるを得んや。且つ、予輩は、畸形の生育を爲したる、尪羸の函館が、果して、何れの日に於て、瘦癒、平康することを得べきかを思ふ毎に、常に、覺えず悚汗せざるを得ざるものなり。扁鵲曰く、疾の腠理に

在る、湯熨の及ぶ所なり、肌膚に在る、鍼石の及ぶ所なり、腸胃に在る、火齊の及ぶ所なり、されど、骨髓に在るに於ては、司命の屬と雖も、奈何ともすることなしと。當今區の疾は、假令、骨髓に在らずとするも、今を失ふて治せずんば、必ず錮疾を爲さん、後扁鵲ありと雖も、尙ほ何んぞ及ばんや。惟ふに、大圈航路たる、津輕海峽の要衝に當る我が函館は、曾に、從來の瘡痏、疾患を、醫療すべきのみならず、進んで、世界の商港として、翻躍する力を養はざるべからず。殆んと、癈疾に等しき此の港灣を以て、歐亞の間に雄飛せんと欲するが如きは、是れ、恰も、翅翮、摧屈して、而かも、千里を致さんとするに異ならず、豈に、亦、岌々乎として危からずや。夫の、本年九月を以て、擧行せられんとする、築港完成祝賀の如き、吾人、其の殆んと無意義なるに、驚かざるを得ず。區々たる、延長三千三十尺の、一條の防波隄、及び、千六百尺の、三條の防沙隄の竣工が、果して、區民の、歡天喜地、蟊の如く躍り、鰲の如く抃ち、身の措く所を知ること能はざる程の、大成功なりや。斯かる瑣末の小成功に對し、萬許圓を糜費して、祝賀會を催すが如き、愚を演ずることあらば、是れ、益々以て、區民の氣宇、器識の小にして、遠大の計なきを、證明するものに非ずや。僅に、防波、防沙隄工事が竣功したればとて、埠頭、倉庫及び炭水供給、船車連絡等の諸般の設備、今日の如く闕くる所あるに於ては、商港たる價値、敢て增す所あるべからず。以上、諸種の設備は、其の功、相輔け、偏廢すべからざるものなるに、之を慮ることを知らず、商港たる各船の設備の、大成を期せずして、瑣々たる、防波、防沙隄の竣工を以て、萬事了れりと爲し、歡欣、踴躍已まざるが如き、其の狂惑も、亦、甚しと謂ふべし。夫れ、土、薄すければ則ち豐殖なく、雲、薄すければ則ち甘霖なし、今、何等、港灣設備の見るべきものなきに、徒だ、防波隄竣工の一事を以て、廣大、豐厚の利の自ら來ることを夢みて、抑も、區民は喜歡無量なるか。

由來、濕を惡みて下に居るは、區民の大患なり。現今、裝貨(つみに)、起貨(あげに)、及び旅客の乘船、上陸には、全く、艀の力を藉りつゝあるも、其の不利不便の、尠少ならざるは、何人も熟知する所、貨客共に、多くの時間と費用とを、徒糜することは勿論、客艀に於

ては、其の體小なるが故に、動もすれば、風浪に掀翻せられ、漂蕩、顛覆の憂あり。貨艀にありては、吃水淺きが故に、常に、海水浸入して、載貨、濡濕の患あり。爲めに、人命貨財に危害を及ぼすこと、少しとせず。只、其の苦痛の甚しからざるに似たるは、他港に比し、艀荷役の聊か速かなるに因るべけれと、一朝、勸察加沿岸より、鹹魚運船の來歸、麕至するや、其の貨艀數約二百隻、石數十萬以上に達し、殆んと、小樽に倍するにも拘らず、尙ほ、貨艀の不足を告ぐること甚しく、之が爲め、裝貨(つみに)竝に起貨(あげに)を遲滯せしめ、帆船汽船の別なく空しく、碇泊、奄留するもの、幾何なるを知るべからず、其の損害を計數するに於ては、蓋し、驚くべきものあらん。故に、恒れて移り難く、目、其の不利を睹、而かも、決然、之を避くるに務めず、仍ほ、積習を承沽し、舊慣に因循し、艀荷役以外に、一歩も打開すること能はざるが如き、其の固陋も、亦、甚しと云ふべく、是くの如くんば、啻に、日進の大勢に伴ふこと能はざるのみならず、從來、擅占したる貨權をも、日に侵削せられ、遂には、全く之を失ふに至るべし。夫れ、一勞せざれば、久く佚せず、暫費せざれば、永く寧からず。

嗚呼、偷安、旦夕の計を恃まずして、區民は、百年の大計を發する意なきか。嗟乎、興に成を守るべきも、興に進取し難き區民を、開導、啓迪して、此の方今の急務、永年の大利たる、港灣政策を樹立し、區の爲めに、萬世の長基を垂れんとする、山田氏の如き、深識、遠慮の士、竟に、再び世に出でざるか。

竊に、自ら思稽するに、自信、自覺なく、目的、理想なき國家が、衰頽、滅亡を免れざるは、古來、歷史の證明する所、今日の强國、雄邦なるものは、皆、牢乎たる自覺と、遠大なる理想とを有せざるものなし。市町村と雖も、亦、是に異る所なきものにして、吾人は、此に、伊太利の大政治家、マジニーの口吻を學ぶものにあらねと、區民の崇卑、函館の盛衰は、之を、區民の理想の有無、目的の高下如何に因て、占知し得べしと、斷言せざるを得ず。夫れ、區民が、動もすれば、滔々乎として、相率ゐて苟且、苟悅を斬め、小成小康に安んずる所以のもの、畢竟、目的なく、理想なきに、職由するものに非ずや。彼の、一條の防波隄、三條の防沙隄の竣工すればとて、早くも已に小成に甘んじ、洋々として喜び、嘻々として樂み、白を擧げ、觴を揚げ、祝賀

の芳醇に、沈醉するが如き、其の目的の卑下にして、其の理想の絶無なることを、自ら天下に揚暴するもの、此くの如き、淺心、狹量、輕佻、儇薄の區民が、焉んぞ、能く盛世に肩して、遐軌を追ふに足るべき。

十年以前、既に暗黑の裡に葬り去られ、湮沒して世間に顯はれず、事の軌躅、今や之を知るものなく、且つ、鐵道院の連絡棧橋が、築造せられたる結果、今日に於て、もはや、論ずる要なきに似たる、故山田區長の、此の棧橋築設案に就て、吾人は、玆に、其の言を啾々するに於ては、或は之を見て、既已の事、復た、論ずるを須ゐずとして、予を目して、愚戇と爲し、猖狂と爲し、予を難ずるものなきに非ざらん。されど、往事を深思するは、來今を戒むる所以、抑も、此の棧橋築設なるものは、實に、港灣改良の先聲、港灣修築の始務たるものなりしを以て、予輩は先づ、之に對し、論評を試嘗み、是に依て以て、港灣に對する、區民の醒悟を促さんと欲するものなり。

曩に、其の棧橋案が、因循、苟且の區會に容れられずして、其の志の遂げざることを見るや、士君子進退の際、亦、難きものあるに拘らず、山田氏は、身を潔くして去り、敢て其の身を挽さゞりき。區の爲めに家を忘れ、職の爲めに私を忘れ、利、苟も就かず、害、苟も去らざりし氏の如きは、眞に所謂、生、則ち志を奪ふべからず、死、則ち名を奪ふべからざるものなり。先民道破すらく、一粟地に在り、時有りて生ず、一說世に在り、時有りて行はると、山田氏や、瑾を抱き、瑜を握るも、遂に示す所を得ずして、空しく恨を銜んで地に入りたりと雖も、其の風軌、德音は、區民を起慕せしめ、區民を感發せしめ、區民を萬里の迷途より回らさずんば已まざるべく、其の港灣修築に對する宿心、素志は、必ずや、其の貽範に率由して、他日、繼紹、賡續之を成すものあらん。然らば、憂思、深遠にして區の爲めに鞠躬力を盡せし其の功績は、決して、泯沒するが如きことなかるべく、其の盛烈は、必ずや、彝鼎に震耀して、後人に烈炳たるに至るべし、氏や、亦、以て瞑するに足らん、歲寒うして、然る後に、松柏の後凋を知り、擧世混濁、淸士、乃ち見はる。吾人は、今日、區の苟且の政多くして、困躓顚頓することを見るに及び、倍々、氏の如き、雄才直氣獨

力中流の砥柱たる國士を、慕思する情に堪へざるものなり。乃ち、予輩、愚劣、萬分を褒揚すること能はずと雖も、終りに莅んで、奉連して、聊か、氏の爲めに數語を綴り、不腆の辭、以て氏を弔する所あらんと欲す。（大正七年三月稿）

草茅危言終

大正八年十月二十七日印刷
大正八年十一月一日發行

實費金壹圓

著者兼發行者　函館區谷地頭町七十九番地　加賀谷定治

印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　阿部節治

非尋常功利書

C.3.22

372
335

終